

三浦雄一郎 & 豪太 南米アンデス山脈 スキートレーニング 日記

2018 年 7 月 15 日 ~ 8 月 3 日

7 月 15 日(土)

成田 ⇒ メキシコシティ (トランジット 泊)

移動 成田 14:25 搭乗 (日付変更線を越えて) 14:15 メキシコシティ到着

7 月 16 日(日)

メキシコシティ ⇒ サンチャゴ 移動

6:00 起床、ラジオ体操&スロトレ、 8:00 チェックイン、10:00 搭乗⇒ サンチャゴ

17:25 サンチャゴ到着(40 分早い) 19:00 ホテルチェックイン 20:00 外出⇒

20:20 サンチャゴ日本大使公邸(平石大使ご夫妻)にて食事会 11:00 ホテル帰着

ともかくサンディアゴまでの道のりは遠かった。

日本を 7 月 15 日出発 14 時間の飛行機に乗り、日付変更線を越え同日 14 時 15 分にメキシコシティに到着。ここで一泊して翌日サンチャゴに向かう。そして翌日 17 日に目的地であるバジェネヴァドスキー場に着くのである。丸々2 日間の移動。

今回の南米でのトレーニングは本来、今年の 9 月に登る予定だったチベット、チョ・オユーのため。しかし、年齢制限で登山許可がおりず、遠征は中止となる

ここでめげないのが三浦雄一郎、すぐに計画を来年の 1 月、南米最高峰アコンカグアに登ることに変更。その為、予定していたトレーニング合宿先が南米で、アコンカグアと近いことからそのまま合宿を敢行することにした。滞在する Valle Nevado(雪の谷)バジェネヴァドはスキー場としては標高 3000m にベースがあり、リフトで上げられる最高所は 3650m、アコンカグアでスキーをすることを考えると高所トレーニングとしてうってつけの場所だ。

今回のトレーニングは二部構成になっている、

- ・序盤の 10 日間は父の高度順化とトレーニングを中心
- ・後半の 5 日間はグローバルツアーのお客さんと一緒にスキーをする

こうして 15 日間の合宿が始まるのであった。

メキシコシティに着くと現地のガイド、山脇さんが迎えに来てくれた。メガネをかけたショートヘア、大阪出身であるという。当初エアロメヒコとデルタエアのハブ空港である第二ターミナルのホテルで 1 泊する予定だったが、その日停電のため急遽第一ターミナルにあるヒルトンホテルまで案内してくれた。チェックインしたが特別やることもなく時差ボケで寝てしまう。夕食はメキシコ料理がおいしいと山脇さんに話すとターミナル内の牛の形をしロゴのレストランがメキシコ料理を食べられるというので、早速行ってみる。

しかし、メニューを見るとステーキばかり…父はサーロインステーキ、僕はせっかくメキシコにきた

から牛のファヒータをオーダー。すると、父がオーダーしたステーキが巨大！ 600g はあるだろう。ファヒータもかなりの量で二人とも全部食べ切れなかった。



(かなり大きなステーキとファヒータ・・・)

その後ホテルに戻り気がつく朝の 4 時、二人とも時差でそれ以上眠れない。昨日は 1 日飛行機にいて体を動かしていないので、朝、ラジオ体操とスロトレを行う。

それでも朝食まで時間が余ったのでテレビをつけるとテレビショッピングがやっている。

どうやら精力剤を売っているようなのだ、テレビの出演者は熱くどれほどこの精力剤が効くかというのをスペイン語でまくし立てるが何をいっているか父も僕もわからない。

不思議な時間がぼーっと流れた

朝食の後、今度は男性の佐野さんという方がホテルまで迎えに来てくれた。

昨日のエアロメヒコターミナルまでのアテンドとチェックインを手伝ってもらう。搭乗、しかしメキシコシティからサンチャゴまでのフライトはぐっすり寝たままで、目が覚めたら着いていた。しかも予定の到着時間よりも 40 分早い。

到着地には英語も日本語も通じないサシャさんという恰幅のいいナイスミドルの女性が <Yuiciro Miura> という紙をもって待っていた。荷物を車に乗せ、本日の滞在場所 ホテルケネディに向かった。ホテルケネディに着くと間もなく部屋に電話がかかってくる。今晚はミウラ・ドルフィンズの元メンバー、サンチャゴで日本料理屋を営んでいる大滝さんと会い、チリの日本大使館に招待されている。大滝さんが来たのだなと思いすぐにフロントに降りる。するとそこには大滝さんに加え、今回、山でのガイドをお願いしているホアキン氏もいた。ホアキン氏は貫田宗男さんからの紹

介でバジェネヴァド近辺のバックカントリーガイドとしてお願いしていた。

慌ただしくホアキン氏と大滝さんと挨拶をする、そして翌朝、再度ミーティングを行うことを約束して一路日本大使館に向かった。日本大使館では大使の平石夫妻がおもてなししてくれた。離れの別邸にて素晴らしいコース料理を大使公邸付きの料理人が作ってくれた

話題もチリの近況から最近やっているスロトレまで盛り上がる。

そして公邸のお茶室でお茶会も開いてくれた。

大使夫妻のお点前は確かとても美味しいお茶とお茶菓子をいただき、さらに父も大使夫妻の指導によりお茶を点てる。チリ到着早々に心を込めた歓迎を受けた。



(チリ到着後、日本大使公邸にてあたたかなおもてなしを受ける)

7 月 17 日(月)

サンチャゴ ⇒ ヴァジェネバド移動

6 時 00 分 起床、7 時 00 分 食事 8 時 00 分 ホアキン氏、ロドリゴ氏 ミーティング

9 時 00 分 バジェネヴァドに向けて出発、10 時 50 分 Hotel Tres Puntas 到着

11 時 30 分 スキー開始、13 時 10 分 昼食、15 時 40 分 スキー終わり

16 時 30 分 チェックイン、18 時 30 分 夕食

朝からガイドのホアキン氏とロドリゴ氏と会う。今回の合宿メインはスキートレーニングだ。

序盤の3日間は高度順化を兼ねてフリーに滑りその後、ホアキン氏とロドリゴ氏のガイドで、バック

カントリーで滑る。

今回の父のトレーニング目的は筋力の回復と高度順化、そして低下している最大酸素摂取量をあげることにある。3週間前 鹿屋体育大学にて体力測定をした際、山本正嘉教授からは、筋肉量はある、ただ力が筋力として最終的に出ていない、最大酸素摂取量が下がっている・・とのことで、今後スキーを通じた筋力向上、そして有酸素能力も 2013 年のデータくらいまで戻すこととアドバイスを受けている。

ただバジェネバドのベースは標高 3000m。一番高いところで 3700m、ほぼ富士山頂と同じだ。

ここでいきなり激しいトレーニングをすると高山病にかかってしまう。

また、いくら三浦雄一郎とはいえ 85 歳、心臓にもいまだ不整脈がある。なので 4 日後のバックカントリースキーは、あまり無理のない近場でいい場所を案内してくれるようお願いした。

サンチャゴからバジェネバドは車で 1 時間半。ものすごく曲がりくねった道を標高差 2500m 上がる谷の入り口にはサボテンが生えていて、まさに南米的な雰囲気だが、標高が上がるにつれどんどん植物が小さくなっていき、ついにバジェネバドのスキー場に着く頃には雪と岩の世界となる。

日本の猛暑から二日かけて来た銀色の世界だ。



西部劇を彷彿させるサボテン



一転して、雪と岩の世界へスキー場だ

運転手のカルロスが僕たちと荷物を滞在先の Hotel Tres Puntas におろし、チップを上げようと振り向くともういない。仕方がないのでチェックインを済ませる。チェックインではリフトチケットと夕食 & 朝食の説明を受ける。

リフトチケットは滞在中同じチケット、そして手首にはプラスチックのバンドを巻かれた、よくコンサートとかで付けるアレだ。このバンドはここに滞在しているという証で朝食のときに見せる。チケットもこのバンドも無くしたら再発行に 50 ドルかかるというが、チケットはいいとして手首につけたバンドを 10 日もつけなきゃいけないの！？

そして肝心の部屋の準備がまだという。移動の連続で疲れていたのでも入りたいと頼んだのだが、ダメ。

まあ、時差ボケ防止と暇つぶしにスキーに行くことにしたが、父はソファに座りぼーっとしている。ちょっと休んだ後に着替えてスキー場に出かける。

このホテルは最上階のすぐ下にフロントがあり、そこからエレベーターで階下の客室に行くようになっている。スキーに出かけるにはフロントを通り駐車場をわたり、向かいのホテル Puente Del Sol の前でスキーをつける。

さすが 3000m のアンデス山脈。バジェネバドのスキー場には木が一本も生えていない。

岩がむき出しの自然の地形をそのままスキー場にしたような場所で、そこから見える表斜面と見えない裏斜面がある。スキーマップでリフトを数えると、このスキー場には普通のリフトが 4 本、高速クワッドが 1 本、ゴンドラが 1 本、J バーが 4 本そして T バーが 1 本ある。

J バーと T バーが現役で活躍していることに驚いた。J バーは棒状で末端が J の形に曲がり丸い円盤が着いている。この棒が稼働しているロープに接続され末端の丸い円盤を股の間に挟みロープに引っ張ってもらう仕組みだ。

T バーは T 字型の大きなプラスチックをお尻の後ろに当てて引っ張ってもらう。

T バーは未だヨーロッパのスキー場で見かけるが J バーはほとんどない。昔、札幌のテイネハイランドにもあったがそれも 20 年ほど前になくなった。懐かしい！スクールの子供達が一生懸命 J バーに引っ張られている。

最初にアクセスできるのが 4 人乗りの Mirador リフト。高速リフトではないのにやたらと距離がある。高所なのでゆっくりと滑ろう。

天気は曇り、木が一本もないので、小さな起伏どころか大きな斜面変化もわかりにくいフラットライト。久しぶりのスキーの上フラットライトに高所で、父には少し大変そう、ゼーゼーハーハーいいながら数ターンごとに休む。

結局昼食を挟み午後 4 時ギリギリまで滑る。僕の考えでは高度順化のため今日は 2 時間程度で、最初の 3 日間は高所順化優先とし、体力をあまり使わないつもりだったけど部屋の事情と久しぶりのスキーが楽しくついつい滑りすぎてしまった。

さて 4 時になったのもう部屋ができたのかなと思ったがなんとカードキーの不具合でさらに待たされる。

スマホの翻訳機能で

「私たちは日本から来てとても疲れている」と翻訳文不機嫌な顔を演じてフロントのお姉さんに見せたが、お姉さんのまぶしい笑顔とスペイン語訛りのたどたどしい英語が可愛くうやむやに。。

やっとの事でカードキーの機械が修復、今日勤め始めたばかりのベルボーイが意気揚々に部屋

に案内してくれた。

部屋にはシングルベッドが二つ。その距離がまた近いこと！

父が得意の深呼吸をするとその吐息がもろ僕の顔にかかる。部屋の大きさもそれほど広くない。

父も僕も整理が苦手な方なのでとりあえず自分たちのシマをつくり一休み。

これから次の移動までの 10 日間、ここが僕たちの合宿部屋だ。

その日は疲れていたのととりあえず宿泊しているホテルのチリ料理レストランを予約した。

そこで父が eel と書いてあったのでうなぎの天ぷらだと思いオーダーしたがただの白身魚だった。

僕はサーモンを頼んだが、ベースのソースが濃すぎてサーモンの味がわからなかった。この国は基本的にお肉を頼んだ方が無難なようだ。でもワインはとても美味しかった



南米到着、初滑りを楽しむ父

7 月 18 日（火）

5:30 起床（豪太のみ）、6:00 スキースキンハイク、7:30 朝食、11:00 スキー、13:00 昼食
14:00 スキー、14:40 スキーシールをつけて登る、15:50 スキー終了、18:30 夕食

昨年からオープン前のスキー場をシールつけて上がることが、僕の密かなマイブームになっている。平昌五輪のときも前朝スキー場を登り、選手しか滑れないコースをオープン前に滑り満足感に浸っていた。

朝、5 時半に起きて登り始めたが真っ暗な上に霧がかかっていた。昨日、なんとなく全体図を把握していたつもりだがヘッドランプの明かりの下では自分がどこにいるか全くわからなかった。

結局登ったものの、霧が濃く、しかもチリの夜明けは遅く、7 時過ぎても暗く、せっかく登ったのにボーゲンと横滑りで降りてきた。

その後、父と朝食を食べた後スキーの準備をして外に出てみると一面真っ白！

早朝の霧がそのまま居座っているらしい。このホテルはスキーをスキーロッカーに預けるようになっていて、そこには管理のお兄ちゃんがいるのだがそれがヒップホップ風。彼に部屋番号を伝えてスキーをお願いすると、

「今は良くない・見えない・危ない」とスペイン訛りのラップ調で言われた。

外を見ると確かに視界は1mもない。怪我をしたらと元も子もないので、こっちも手振りを加えて「オッケ」といい、とりあえずフロントのソファに座り込む。

昨日のチェックイン待ちといい今日の霧といい随分とこのソファにも馴染んできた。馴染みすぎて父は1分もしないうちにいびきをかき始める。

1 時間待っても霧は晴れない。どうしようか考える。今回のトレーニングの目的の中に酸素運動のためスキーを使ってシールで登ることも入れていた。霧がなかなか晴れないのでスキーシールで登るトレーニングに切り替えた。

こうした方針を打ち出したにも関わらず、なんとスキーを履いた時点で霧が少しずつ晴れはじめ、しまいには雲の合間から太陽がでるではないか！急遽、やはり普通にスキーをすることにした。

2 時間ほどスキーをして、昼食休憩をはさみ、その後、最初に検討していたスキーシールでスキー場の端のコースを登る。軽い酸素運動を入れた方が高度順化しやすいかなと思ったのだが、思いの外、父にとって標高3千~~の~~のシール歩きは疲れたようだ。



シールを着けてのトレーニング

夕食は Puerta Del Sol にあるイタリアンを予約した。このシステムは滞在しているホテル以外に他のホテルと提携して、レストランが選べるようになっている。Puerta Del Sol のフロントに聞くと目指すイタリアン料理は-1 階にあるという。早速エレベーターで下のボタンを押すとボタンの表示がすぐに消える。おかしいなと思い何度も押すがまた消える。そうこうしているうちにエレベーターがついたのでボタンをみるとなんとフロントが-3 となっていた。そこから-2、-1、1、2 と 9 階まである…なぜスキー場から歩いて入る一階を-3 とするか謎だ。

さて噂のイタリアンレストランはプール脇にある。どうもこのホテルの方がグレード高そうだ。レス

トランの扉が大きくとてもおしゃれ。しかし、肝心の僕たちの予約がない。確かに今日、Tres Puntas で予約をしたはずなのだが、リストに名前がない。ホテルゲストは共通リストが作ってあるらしく、本日はあなたのホテルのチリ料理に予約が入っているといわれた 昨日の場所だ。

何かの手違いだろうとおもい仕方なくホテルに戻る。昨日ボトルで頼んだのでそのボトル持って行き、昨日はシーフードで失敗したので肉料理を頼む。僕はリブ、父はステーキボリュームも味も問題なし。やはりチリは肉だ

7 月 19 日(水)

6:00 起床、6:30 スキーシール(豪太のみ)、8:00 朝食、10:00 スキー開始

12:30 昼食、14:00 午後スキー、16:00 スキー終了、18:30 夕食

今朝起きて外に出ると満天の星空だった。昨日の霧とはうって変わってクリアな朝。意気揚々とヘッドライトで山を登り始める。

7 時頃になるともう明るくなりヘッドライトが必要なくなる。周りを見渡すと朝日に照らされた雄々しい山々が広がっていた！オレンジ色の朝日に照らされる岩と雪の山をみて感動に浸りながらスキーを上に向けて登った。昨日からの積雪は 4 センチ、整備されたコースの上にとっすらと積もりわずかながらパウダー感と雪煙を演出してくれた。これだからファーストラックはやめられない。



美しい朝、静かな山並み



ファーストラック！

天気は午前中良好。朝食後、最初の一本を滑ったあと、今日は父と僕は別々に滑ることにした。それぞれのペースでこの天気を楽しもうということだ。

僕はこれまでホテルの正面に見えているコースをメインに滑っていたが、裏斜面が気になり行ってみることにした。表斜面でも十分に広く楽しめる、しかし裏斜面にきて驚いた、表斜面と同じくらい広くさらに人が少ない。斜度もまあまああり、初心者には難しいだろうが、その分まだ手つかずの新雪が残っていた。しかしこれが曲者でコース外に行くと岩がうっすらと新雪に隠れている程度で時折、ガリガリと岩を踏む、コース外は要注意だ。それでも雪質は申し分なく、十分楽しめた。

そしてこのスキー場のスケールの凄さを知った。

父は父で表斜面の山頂から下までつながるコースを開拓したという。二人とも午前の天気を十分に満喫できた。3日目になりようやくこのスキー場の全容らしきものが見えてきた。

昼食後、外に出るとまた雲がかかりはじめさらに霧となる。吹雪いてきて父は「今日はこれくらいにするか」といってホテルに戻るという。僕はまだ滑っていないコースがあるので視界が悪いけど、まだ乗っていないゴンドラや尾根のコースを滑ってみる。なんやかんやで2時間滑って降りようと思うと、なんと父が尾根沿いのリフトから降りてきた。父は「部屋に帰って寝るよりもマシ」といって、結局午後もずっとそのまま滑っていたようだ。さすがスキー好き、これだけ体が動くということは高度順化も進んでいるのだろう。

夕食は向かいのホテルでビュッフェにした。ビュッフェは野菜、前菜が豊富で肉や海産物は目の前で焼いてくれる。お父さん、相当気に入ったようだ。



やはりスキー好きな父

7 月 20 日(木)

6:00 起床、7:00 朝食、8:40 ロドリゴさんと合流、9:00 スキー開始、12:00 昼食

13:00 午後スキー ~ 16:00 スキー終了、18:30 夕食 Monte Bianco

天気 晴れ 温度 山頂 マイナス 10 度

今日は朝からガイドのロドリゴさんが来て、スキー場を中心としたスキー山岳トレーニング(バックカントリー)を案内してもらう予定だ。ロドリゴさんはやる気満々で 4000m でも 5000m でも案内するという。しかし、父の順化もまだ完璧ではないので、正直そのやる気に応えられる気がしなかった

天気は昨日の朝に勝るとも劣らない快晴！スキー場と周りの山が眩しい。

気温は放射冷却のせいかととても寒く、体感的にマイナス 10 度は下回っていた気がする。

まずはリフトを乗り継いでアンデスエクスプレスの山頂まで行く。そこから裏側の Tres Putasu へ降りる。本来は Tres Puntas の山頂方面に行くつもりだったが、ここは標高 3400m、まだ十分に父のコンディションが整っていなかったなので、谷間をスキーシールで上がり何本か T バーで滑ることにした。午前中はそんな感じでロドリゴさんの本領を発揮することができなかった。午後、父は今まで通り、一人でスキー場を滑りたいということ。しかし、せっかくロドリゴさんを二日間雇ったので僕としてはもう少しバジェネバドのスキー場とスキー場外を知りたく、ロドリゴさんに僕だけ案内をお願いした。

午後は早速、午前中に行けなかった Tres Puntas の J バーに乗り山頂に行く。ここはスキー場の中で最も標高が高く 3680m 空気がさらに薄く感じる。山頂近くにお腹とくちばしが白い鳥がパトロール小屋にとまる。ここにきて初めて見る野生動物でロドリゴさんにその鳥のことを聞くと、名前を思い出せないのだが、猛禽類で鷹の仲間だそうだ。

Tres Putas の山頂から Plomo 山の全容が見える。Plomo 山は標高 5424m、アコンカグアのトレーニングに使う山で登るルートをロドリゴさんに教えてもらった。

この Tres Puntas から Plomo 山側の谷間に降りて中間の氷河まで谷沿いにいく、その後、氷河から西側の尾根に登り、尾根沿いに山頂行くという。大体普通二日間の行程だそうだ。その後ロドリゴさんと Tres Puntas のメインゲレンデから外れ向かい側の山の中腹をトラバー

スする。しかし、トラバースしている間もガツガツとスキーに石が当たる。この二日間雪が降ったとはいえ 15 センチほど、もともとの積雪量が少なく、さらに風にさらされこの付近の雪の付きが悪い。山頂直下までトラバースしそこからスキーを担いで山頂まで登る。たどり着いた斜面には一本だけ滑ったラインがあった。しかし、この雪のつき方は気をつけなければ・・・浅いとがつつり石や岩を踏んでしまう。ロドリゴさんが最初に滑る、途中ガリガリ！と音がするやっぱ雪が薄い。慎重にロドリゴさんが行ったラインよりも右を滑る。30m ほど山頂から降りると、一面綺麗な斜面が広がっている。ロドリゴさん曰く、
「ここからは大丈夫！ 楽しもうぜ！」と颯爽と滑り降りるが、3 ターンほどすると「ガツン」と音がしてロドリゴさんのスキーが外れてゴロゴロと転がる。
思いっきり岩を踏んだようだ。後ろから外れたスキーとストックが転がっていたのでそれを回収してロドリゴさんに渡す。そのスキーの裏面を見るとがっぽり穴が空いている。
ロドリゴさんは「岩に当たるくらいなんともないね」というが、僕は岩が当たるのはいやだ。
広がる雪斜面がすっかり地雷地帯に見え、パウダーを楽しむどころではなかった。
僕もその後、何箇所かガリガリと石を踏む、その度にスキーに「ごめんなさい」と謝る。
このスキー場は一見、真っ白な雪に覆われているが、吹き溜まりや風によって付き方が薄いところがある。コース内はしっかりと降雪機で雪を降らせるので問題はないのだが、コース外は気をつけなければ行けない。
午後、二人で 2 時間半ほど楽しみホテルに帰る。しかし部屋に帰ってもまだ父がいない、もう 16 時近くなのに・・・と心配してスキー場に迎えに行く。すると 16 時半ころやっと降りてきた。
なんとあれからこの時間まですべっていたのだ。よっぽどスキーが好きなんだな。







7 月 21 日(土)

6:00 起床、7:30 朝食、9:30 スキー開始 スキー場内撮影、12:00 昼食、

13:00 午後スキー ～ 16:00 スキー終了、18:30 食事 SUR

天気 曇り時々晴れ 気温(体感)-5 度

今日はロドリゴガイド二日目。昨日滑った斜面の状況で特にバックカントリーの必要はないと感じ、今日はロドリゴさんに撮影係になってもらいスキー場内を滑ることにした。

しかし、最初的一本滑る時ロドリゴさんにカメラを任せたがその映像を確認すると、ブレブレでよく被写体を外す。早々にロドリゴ撮影係を免除し僕が撮ることにした。それでも本人はヘルメットについたゴープロで撮るから大丈夫というのだけど、彼はいつもキョロキョロしているので映像はあまり期待していない。

午前中いっぱい滑り昼食を挟み撮影。午後、父は自由に滑りたいというので、僕とロドリゴさんの二人でスキー場内の小さなパウダースポットを探しに行った。

昨日、あまりにも石に当たったので午後のポリシーはノーロックポリシーとする。リフトから見るとスキー場まわりでも十分いいところは残っている。、コース外から 10 分ほどのハイクでまだ誰も滑っていないところがあったり、コース脇がすこし荒れているがいい雪が残っていたりする。しかし、ロドリゴさん自分の滑りに夢中なのか、ほとんど振り返らずそのまま行ってしまう。最初もミラドルリフトに乗るといいながら突然道を外れ、ミラドルリフトではなくさらに下のリフトまで行ってしまう。こっちはすぐそこのミラドルリフトに乗るつもりでいたのでバックルをせずブーツがウォークモード状態、どこに行くのかわからないので必死について行く。下で追いつき「ミラドルに乗るではなかったの？」と聞くと、

「俺のインスピレーションはここに来いと行っていた」

そうかインスピレーションか。。。

また、ハイクして手つかずのパウダーエリアについた。一応ロドリゴさんガイドなので最初に滑る。そして基本的にはガイドが滑り終わるまで僕は上で彼を見守る。万が一、雪崩に巻き込まれたとき、スポットでなければいけないからだ。そして最初のスキーヤーは普通ある程度滑ったら安全な場所で後続のスキーヤーをスポットするが、この場合の方法なのだが、ロドリゴさんは止まらずそのままリフトの方まで行ってしまう。残った僕はまあいいかと思い滑り降りるのだが、雪崩が起きたら誰が僕のスポットをするのか。。。とても前向きなガイドであった。とはいえ、彼がいてくれたおかげで色々な場所を開拓することができたし有益な情報が手に入った。

まずバジェネバド以外のスキー場について、

このスキー場周辺にはバジェネバド以外に隣にコロラドとラパルバというスキー場がある。コロラドというスキー場はこの辺りで最も古く 70 年の歴史があるという。リフトもほとんど T バーか J バー、バジェネバドのスキー場からもよく見えて標高差が 500m はあろうかという T バーがある。とても広い斜面で新雪がふったらよだれがでそうな斜面だ。ここでは US のモーグルチームがたまに来て練習しているという。

ラパルバはもう少し富裕層のスキー場だという。バジェネバドのアンデスエクスプレスの頂上から見る事ができる。全容は見えないが同じくらい大きいらしい。

バジェネバドは富裕層および外国、特にブラジルから来る客が多いという。周囲3つのスキー場のなかでバジェネバドが一番大きいというが、それぞれ同じくらいのスケールの山でリフトでつないで渡ることもできるらしく、共通券も売っている。しかし今の段階ではバジェネバドだけでも十分楽しめる。

さらにこの付近の高峰、プロモ山についても面白い話をきいた。この辺りは古くからインカの通り道であったという。そしてプロモ山はインカの聖山とされていて、農作物の不作や天災が続くと6歳〜7歳の子供を頂上に連れて行き生贄にしたという。近代的な登山が始まったとき、山頂にはいくつかのミラ化した子供が発見されたそう。古代インカの子供時代は辛いものがあったのだろうなと思った。

午後3時にロドリゴさんと別れ、一人で何本か滑っていると父に会った。

父も結局16時くらいまで滑っていた。滑りを見るとだいぶ力強く滑っているしロングランもできている。初日とは比べ物にならない、良く順化ができてきたようだ。

夕食は父の好きなビュッフェのあるミラドルレストランを予約した。しかし、実際に行ってみると予約が入っていない。この日の予約はPueta Del Sol ホテルにて行った。この時、予約係が片言の英語しか喋らないので怪しいなと思ったが、案の定これで予約の取り違いは2回目である。お腹が空いていることもあり立腹しながら、自分のホテルのフロントで一番英語のうまいフロントをお願いしてこれから3日間、ミラドルレストランの予約をした。

次の南米行までもう少しスペイン語を練習せねば。

さて、今日はここバジェネバド30周年のお祝いだそう。しかし、父と僕はそんなお祭りに行く気力もなくバタンキューでベッドに入る。ところがお祭り騒ぎは夜中まで続く。

ビートの効いた重低音が夜2時過ぎまで窓ガラスを揺らしていた。